
私の中の死

天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の中の死

【Nコード】

N2982B

【作者名】

天

【あらすじ】

これは私が経験したものです。常に人は『生』と『死』の間で生きていくのだと教えられました。

『死』とは悲しいもの・・・

それが命を懸けて愛を注いでいる人だったら尚更のこと。私は以前まで『死』という言葉が簡単に何度も使ってきた。

『あいつなんか死ねばいい。』や『お前なんか死ね。』等特に意味もなくただただ相手への憎しみを表す言葉の一つとして。しかし、私は人生という路の中で少しずつ『死』という言葉の意味を理解していくことになるのです。意味を理解するというよりも『死』を通して意味を体験することになるのです。私がまだ高校生の頃に父がたの祖父が永眠し私が働くことになった高齢者施設でも数名永眠し入居者と仲の良かったスタッフは涙を流すこともありましたが私はその現場にいても私は『悲しいだろうな』や『辛いだろうな』ぐらいしか思っています。

社会人として数年たちますが未だ年賀状をだしたことがないので。理由は一つ。毎年親族が永眠してしまうからです。学生の頃には『死』の意味を理解することができなかった私ですが社会にでて一年目で少しずつ理解し又、私自身変化していくことになるのです。そのきっかけともいう出来事が母方の祖父の『死』なのです。

母方の祖父にはとても可愛がってもらい私も大好きで自慢の祖父でした。

家もさほど離れていなかったので長期の休みには必ず会いに行っていました。祖父の料理はとても美味しく行けば必ず祖母ではなく祖父が料理をしてくれました。特にきんぴらごぼうは未だに忘れることができないほど美味しかったです。その祖父が死んだことにより『残される側の辛さ』を体験することになったのです。通夜では泣かないと決めていたのに眠っている祖父に手を合わせた途端大好きだった祖父との想い出がいっぺんに溢れ、それが涙となり流れてきたのです。涙をこらえればこらえるほどとめどなく溢れだすので

した。

この祖父の『死』をきっかけに私は『死』という言葉を手軽に使うのをやめることにしました。しかしこの時はまだ『死』について本当の意味を知り始めただけにすぎなかったことを後に気付くのでした。私が社会にでて三年目のことです。ある女性と付き合うことになったのです。その女性とは結婚を考えての付き合いでした。

あれは初夏の夜のことでした。私が仕事から帰ると彼女が私に『赤ちゃんができたみたい。』と告げてきたのです。素直に喜びました。自分の子供が自分の愛する女性のお腹の中にいることが嬉しかったのです。

次の日から私は時間を見つけては子供の名前や遊ぶ計画を考えるようになってきました。

周囲からは『まだ気が早い』と云われましたがそんなことは全く気にも止めず夢中になっていました。しかし今の私の収入では養っていくことが難しいという現実もありました。そこで私は仕事が休みの日にはアルバイトを少しでも生活費になればと思いました。真夏の中肉体労働で倒れそうになりながらも『子供の為。愛する彼女の為』と激をとばすことで乗り越えることができました。子供の名前も決まり一安心したその時私の幸せは途切れてしまうのです。

9月2日の昼前彼女から電話がありました。声が暗い。何だろう？
『どうした？』

『ごめんなさい・・・赤ちゃんいなくなっちゃったの・・・ごめんなさい。』

何を言っているのだろうか？『私が赤ちゃんを殺したの。ごめんなさい。』

全く理解できませんでした。いや、理解はしていたかもしれませんがただ信じたくありませんでした。電話を終えしばらく放心状態になっている自分がいました。少しずつ時間がたつにつれ意識が戻った瞬間涙が流れ出したのです。しかし、泣く訳にはいきません。

彼女のほうがもっと辛いのだから。

でも溢れ出る涙を止めることができません。

どのくらい時間がたったろう。

やっと涙が止まりました。

私は急いで彼女の元へ向かいました。

何か嫌な予感がしたのです。やっとの思いで彼女の家に着きました。一回・二回・三回インターホンに反応がありません。まさかと思つたその時彼女が玄関から出てきたことに安心しました。しかし、彼女の顔には血の気がなく頬はやつれていました。彼女は私を部屋にあげたあと布団に入り背中を向け呟いたのです。『ごめんなさい。私が赤ちゃんを殺したの・・・』

辛かった。

『違うよ君のせいじゃないよ。俺がもつと傍にいなかったからだよ。』

それでも尚自分を責める彼女に何も言えずただ頭を撫でることしかできない自分に非力さを感じずにはいりませんでした。

『帰つて。今は独りになりたいの。落ち着いたら連絡するから。』

そう言われて私は彼女がそれを望むならと思ひ帰ることにしました。どうやって帰つたか記憶にありません。それでも家に帰り混乱している頭の中を整理してみることになりました。しかし、悪い夢を見ている気がしてしょうがないのです。

気がつくと食事もとらずに布団の中で泣いていました。誰にも気付かれないように身体を丸め声を殺して・・・気付くと朝になっていました。今日は仕事の日。休むわけにもいきませんでした。泣くだけ泣いたのだから大丈夫。平常心を保たなければ・・・

家をでると視界に入る全てのもがモノクロに見えるのです。ふと足を止めると私は高い建物を探していました。今日仕事が終わつた後自分の人生を終える為に飛び降りる高いビルを・・・

職場に着き普段通りに仕事をしている自分に安心しました。帰りにしようとしていることを気付かれるわけにはいかなかったからです。しかし何か違和感を感じ手をとめました。直ぐに違和感の原因に気

付きました。鏡の前に行き笑ってみると笑っていないのです。喜怒哀楽の表情が出来なくなっており全て無表情なのです。午前中はなんとか仕事を終え休憩に入ることができました。『ほっ』として気が緩んだ瞬間でした。とうとう壊れたのです。殺していた感情が全ていつぺんに出てきてしまったのです。涙ももうでないと思っていたのにとめどなく溢れてくるのです。

『子供に会いたい。名前を・・・決めたばかりの名前を呼んであげたい。一緒に遊ぶ計画もたてたのに。生き甲斐だったのに。もういやもう何もかも疲れたよ。』

そんな時でした。一人の人に背中を叩かれたのです。『そんなことを言っではいけない。貴方の子供はそんなことを望んでいないよ。』そんなこと言われてももうどうでもいい。私の人生はもう終わりにすると決めたのだから。このまま生きていても『幸せ』はこないのだから。その人は私の肩を掴み言いました。

『子供は貴方の傍にずっといるよ。いつまでも貴方の傍から見守っているんだよ。子供は悲しんでいないはず。子供は自分の運命を知っている。子供は親を選んでやってくるんだよ。それなのに貴方が悲しんでどうするの。自分の子供にそんな姿を見せてはいけない。お願いだからしっかりして!!』そう言われて私は少しずつ落ち着きはじめていました。もしそれ（子供が私の傍にいること）が本当ならこんな姿を見せてはいけない・・・

この出来事が私に『死』という本当の意味を教えてくださいましたように思っています。（まだまだ知らないことがあります）この経験をしてから私は『死』という言葉にとっても敏感になってしまいました。それがそれでも良いと思っています。何故なら『死』という言葉はそれほど深く重い言葉だからです。そういえば私の背中を叩いた人の話しによると、何処かの国では『死』悲しいものではなく喜ばしいものだそうです。それは『死』を迎えることによって『この世』から『あの世』への旅立ちらしいのです。言葉には良い意味と悪い意味がありますが私は『死』の良い意味を『旅立ち』と読みとらえたいと思います。

ます。死んだ子供が傍にいてくれるかどうかはわかりません。ですが、親としてはやっぱり子供には傍に居てほしいものです。ですから私は『子供が私の傍に居てくれる』ことを信じてみようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2982b/>

私の中の死

2011年1月12日22時30分発行